

教育講演

こどもが考えること

—センダックの絵本よりの精神分析的考察—

木部 則雄 (白百合女子大学文学部児童文化学科発達心理学専攻)

I. はじめに

遠く過ぎ去った子どもの頃に、私たちは何を思い悩んでいたのだろうか？ 子どもがこころに描く情景は、大人になり日々の仕事や雑事に追われた生活に埋もれ、その記憶は断片化し、今や彼岸の彼方となってしまったかのようである。本講演では、センダックの『かいじゅうたちのいるところ』⁶⁾、『まよなかのだいどころ』⁷⁾を素材にして、子どもの心的世界を精神分析的に明らかにし、子どものこころの情景を考察したい。

II. 『かいじゅうたちのいるところ』⁶⁾

主人公はマックスという少年で、おそらく小学校入学前の年齢であろう。この作品はマックスがいたずらっ子真っ盛りの表情を浮かべて狼のぬいぐるみを着て、部屋の壁に釘を打っている場面から始まる。マックスは母親にひどく叱られ、お仕置きとしての夕食抜きを受け、ベツルムに閉じ込められてしまう。マックスは余裕綽々の態度をしてベツルムにいます、そこは木々に覆われてジャングルの様相を呈してくる。そして、そこは大海になり、マックスは数年以上に及ぶ長い航路の旅に出る。その後、マックスはかいじゅう島に上陸し、その王様になった。マックスはかいじゅう島の王様として君臨し、好き勝手な時間を過ごした。ある日、マックスはかいじゅうたちに夕食抜きでベツルムに行くように命令した。その時に、マックスは遠く離れた自宅からおいしそうな食事の臭いを感じた。彼は王様を辞める決心

をして、かいじゅうたちに別れを告げた。かいじゅうたちは「行かないで！ 食べたいほどに愛しているのに」とマックスにかいじゅう島に留まるように哀願するが、マックスは帰路への航海に出発する。1年以上の航海の後に、マックスは自分のベツルムにたどり着いた。そこには、まだ暖かい夕食が用意されていたというものである。

この作品はセンダックの作品の中で、特に全世界で多くの子どものために愛読されているものであり、そこには普遍的な子どもの心的世界が表現されているに違いない。マックスはいたずらの罰として、日本でいう押入れの刑に母親から処されてしまう。子どもの頃、母親から「こんなことしたら、夕飯抜きだからね！」と叱責された経験のある人は数多くいるはずに違いない。マックスはめげることなく平然としているが、おそらく彼は泣きながら寝入ってしまったに違いない。「押し入れなんか、怖くない！」と叱責する両親に嘔いても、押し入れに入れられれば、数分後に「ごめんなんさい、もう二度とやらないから、ゆるしてください」と泣き泣き謝った記憶のある人もいるであろう。しかし、両親が簡単に許してくれなかったり、恐怖のあまりに寝入ってしまったこともあるはずである。つまり、かいじゅう島の世界はマックスの夢あるいは押し入れに閉じ込められ、そこで我慢するためのマックスの空想によって描かれた世界であった。精神分析の創案者のフロイト²⁾は「夢は願望の充足である」と有名なフレーズを記述しているが、まさしく母親から叱られたマックスの願望は、かいじゅう島の王様になっ

て君臨することであった。本作品の最後には、母親から受けた罰をかいじゅうたちに命令することで、マックスの立場はまさしく母親の立場となる。つまり、現実の世界とまったく逆のことがこの世界で起こっている。現実の世界では、かいじゅうはいたずらっ子マックスであり、王様は母親あるいは両親である。かいじゅう島での生活は日頃のマックスの鬱積したストレスを開放し、マックスの願望を充足させた。しかし、そうした空想世界の逆転した関係に、段々飽き飽きとしてきたのであろう。かいじゅう島のマックスはおそらく空腹のあまりに、現実の夕食の臭いで目が覚める。睡眠から覚醒、つまり夢から現実に向かってマックスは帰路についた。目が覚めると、そこには母親のおいしそうな夕食が用意されていたという結末になっている。

ここまでの『かいじゅうたちのいるところ』の解説によって、マックスがこころに描いたものは、現実の世界とまったく逆であるかいじゅう島での王様になる夢あるいは空想であることは一目瞭然である。こうした子どもの空想は精神分析的には万能感と称されている。マックスは自らの「子ども性」(子どもであるがゆえに、大人から理不尽で、無力な立場に追いやられるということ)を否認し、かいじゅうたち(ここでは自分を叱った母親とも、自分でも取り扱いきれない自分の攻撃性とも考えられる)に呪文を掛けて、かいじゅうたちの支配者になる。ここには、現実をまったく無視したマックスの夢とも空想とも思われる世界が展開する。これは子どもの典型的な健康な万能感の世界の一例と考えることができる。

こうした子どもの健康な万能感の表現は、子どもの日常生活の至る所に見受けられる。例えば、本の主人公になったり、テレビのヒーローになったりすることである。なぜ子どもに万能感が必要かといえ、おそらく二つの理由が考えられる。まず、大人が考えるほど、子どもは純粹無垢でもお気楽な存在でもないことである。子どもから大人になるにあたって、子どもには躰を受けるといふ過酷な仕事が待っている。人間にとって、本能は生きることに必須であるものの、時に制御不能な厄介な存在である。

赤ん坊は本能の趣くままに、お腹が空けば泣き喚き、寂しければ抱っこして欲しいと泣いたりする。しかし、子どもが躰けられるということは、本能や願望を我慢するような訓練を受けるということである。

マックスはおそらく今までの躰の復讐として、家を散らかし壊そうとさえしている。これは子どもの親へのある普遍的な陰性感情の発露を表現していると言えるであろう。子どもの論理に従えば、「いつも、いつも我慢ばかりで、子どもは辛いよ!」といったものである。時に、マックスのように暴れてみても、所詮子どもが大人に勝つことはできない。そこでせめて夢や空想の中だけでも、大人に圧倒的な勝利を収める必要性が子どもの精神の健康を保つために必要になってくる。そこで、マックスは自らの精神の安定を保つために、かいじゅう島に行かざるをえなかった理由である。

子どもにとって健康な万能感が必要な二つ目の理由として、それは未来志向に関することである。子どもは否が応でも成長し、大人にならなければならない。子どもに「大きくなったら、何になりたいの?」と尋ねれば、素直な幼児なら、きっと「サッカーの選手になって、大活躍するんだ!」とか、「大きな会社の社長になって、大金持ちになる!」など、子どもはその子なりのアメリカンドリームを語る。マックスに同じ質問をすれば、マックスは「かいじゅう島の王様になりたい!」と答えるであろう。マックスは権力を思う存分発揮できる大人になりたいという願望を持っていることを意味している。これは子どもにとって成長の原動力となり、エネルギーの源になる。

こうした理由から、子どもにとって健康な万能感を十分に享受することが、健康な子どもの心的発達に必須のものである。

Ⅲ. 『まよなかのだいどころ』⁷⁾

主人公のミッキーはまだ幼児の体型であり、3、4歳といったところである。ミッキーが真夜中の騒音で目を覚ますところから、本書は始まる。騒音の源は両親の寝室であり、ミッキーは「うるさい! 静かにしろ!」と叫ぶと、裸になって暗闇に落ち込んでしまった。そして、

両親の寝室を通り過ぎて、真夜中の台所に着地した。そこには奇妙なパン屋さんが朝のケーキを焼いていた。ミッキーは小麦粉の入ったボールに入れられ、かき混ぜられた。パン屋たちはミッキーが入ったねりこを朝のケーキを作るためにオープンに入れるが、危うく難を逃れる。そして、ミッキーはねりこをこねて飛行機を作った。ミッキーはその飛行機に乗り込んで夜空に向かって飛び立とうとすると、パン屋さんたちはミルクが欲しいと悲惨な顔付きでミッキーに叫んだ。ミッキーは真夜中の台所の天の川に辿り着き、大きなミルク瓶の頂上からその中に飛び込んだ。ミッキーは「ぼくがミルクのなかにいて、ミルクはぼくのなかにある」と歌った。それから、下でミルクを待っているパン屋さんにミルクを注いだ。パン屋さんたちは「しあげはミルク！」と大声で歌いながら上機嫌であった。ミッキーは大きなミルク瓶の頂上で雄叫びを上げて、ミルク瓶を滑り落ちると真っ直ぐに自分のベットに戻って、安らかな眠りについた。

ミッキーは真夜中にどんな騒がしい音で目を覚ましたのであろうか。おそらく、それはミッキーの両親の性的な交わりと考えることが自然であろう。ミッキーはおそらく彼にとって苦悶の喘ぐかのような母親の呻き声を聞き、「うるさいぞ しずかにしろ！」と怒鳴ったのであろう。幼児が両親の性交を見ることは子どもの心的トラウマ、心的発達に弊害となることは、フロイトを初めとした多くの精神分析家が詳細に論じている。フロイト²⁾は『ある幼児期神経症の病歴より』(1918)と題された論文で、狼男と称せられるロシア人貴族の症例を報告した。こうしたエディプス葛藤を体験する以前の幼児が性的場面を想像することを「原光景」として論じた。メラニー・クライン⁵⁾はフロイトの「原光景」の概念を洗練し、「早期エディプス状況」として論じた。クラインの初期の代表作である『児童の精神分析』(1932)に記述されている症例のピーターはこうした悩みから遊ぶこともできなかった。クラインはピーターとの精神分析でピーターが弟はどのようにしてやって来たのかという好奇心で占有され、それが両親、両親の関係性から生じ、性器に関係することを明ら

かにした。主人公のミッキーの叫びは、狼男やピーターのような両親の性交に対する理解しがたい恐れを叫んでいると考えられる。

その怒りの叫びの後に、ミッキーは暗闇に落ち込み、裸になって両親の寝室を通り過ぎて真夜中の台所に着地した。ミッキーは騒音の源を探索することなく、暗闇に落ち込んでしまった。このことはミッキーがすでに騒音の源を母親の苦悶あるいは両親の快楽に耽る光景であることを知り、両親というカップルから排除され、孤独に苛まれている落ち込んだ自分を表現しているかのようである。辿り着いた処は台所であり、そこは母親の基本的な養育機能を意味する場所である。おそらくミッキーは苦悶状態で機能しない、あるいは性的快楽を貪る女性としての母親に失望し、養育する母親を探しに台所に向かったのであろう。

しかし、その台所に待っていたのは奇妙な3人のパン屋さんであった。パン屋さんたちはミッキーをミルクと間違え、ねりこと一緒に掻き回され、オープンに入れられてしまう。ミッキーとミルクの間違いは、MickeyとMilkの最初の文字にあるのであろうが、ミッキーは両親というカップルから排除され寂しさを慰めてくれると期待した台所に行ったが、逆にミルクにされ、覗き見の罰として火炙りの刑に処せられてしまった。こうした意味で、パン屋さんは見てはいけないと叱責する両親カップルと考えることができるであろう。現実的に、両親の性的場面に遭遇した子どもは、おそらく両親から「どうして、こんな夜に起きてるんだ！」と怒鳴られるか、あるいは優しく「あら、どうしたの？ 早く自分の部屋に戻って寝ようね」と言われ、寝室に招かれることは決してない。こうした状況にどう対応するかは、それぞれの子どもの欲求不満への耐性という素因と今まで主に母親から受けた養育体験に依拠する。ビオン¹⁾は欲求不満時にいかに考える能力が発達するかを論じ、同時に母親の養育機能をコンテナーとして記している。狼男やピーターはこの両親の性的関係から離れることができずに、その関係により深く関与しようとして精神的変調を来したが、このことは孤独に耐えること、あるいは排除された状況という欲求不満に耐えること

ができなかったことを示唆している。ミッキーはひとまず孤独に耐え、新たな自分を支援してくれる対象を見出す旅に出発したことになるだろう。

オープンから脱出したミッキーはねりこで飛行機を完成させる。つまり、処刑場からの脱走計画である。しかし、この時にパン屋たちがミッキーに「ミルクがないと、あさのケーキをつくれなさい！」と懇願する。ミッキーの脱走計画は、ミッキーの遭遇した両親の性的場面⇒覗き見⇒懲罰からのものであったが、パン屋たちはミッキーにミッキーが台所に来た理由、つまり母親の愛情の証であるミルクのことを思い出させる。この時点で、パン屋たちはミッキーによい体験をさせるための手助けをする対象として機能している。ミッキーは天の川 (Milky Way) を目指して飛び立った。そして、大きなミルク瓶の頂上に辿り着くと、そこにダイビングをした。これはミッキーが探し求めていた母親の全能的な愛そのものに包まれた状態を示唆している。ミッキーは裸になり、自分とミルクの境界がなくなっていることは、母親との一体化を暗示し、あたかも胎内にいた頃のことを想起しているかのようである。ミッキーが受けた衝撃は母親のミルクという羊水に包まれ、母親と一体化していた胎児期にまで遡らなければ癒されることがなかったとも言うことができるだろう。

ミルクという母親からの愛情を満喫したミッキーは、ミルクを下で待っているパン屋たちにミルクを分け与えた。そして、パン屋たちはミルク入りのねりこをかき混ぜ、パンを作ることができた。神がどのようにして人間を作ったかという逸話として、神がパンを焼くようにして人間を創ったと欧米人は隠喩的に認識している。つまり、パンを作ることは子どもを作ることと同等視されることになる。このように考えると、その前段階として、パン屋たちが数本の大きなスプーンをケーキのねりこの入っている大きなはちでかき回していたことは、おそらく両親の性交を意味していると考えても強ち間違っていない仮説となるだろう。ミッキーは子どもとして十分な愛情を満喫したために、両親の性交を承認することができたのであろう。ここでのミルクはある意味、精液と同等視されて

いるのかもしれない。パン屋たちは大喜びで、焼き上がったケーキを抱えながら、「これでいうことありません！」と大はしゃぎである。ケーキ作りは、ねりこを混ぜること＝性交、オープンで焼かれること＝妊娠、そして焼き上がりのケーキ＝出産したばかりの赤ん坊という構図として理解される。

ケーキの焼き上がりと同時に、ミッキーはミルク瓶の頂上に上がり、「コケッココー！」と叫んで、元のベットに戻って安眠につく。胎児だったミッキーは出産を経験し、元の幼児のミッキーに戻った瞬間であった。最後の頁に「★ミッキー、どうもありがとう。これですっかりわかったよ ★ぼくらがまいあさかかさずにケーキがたべれるわけが」と記述されているが、子どもができるプロセスをミッキーが隠喩的に説明したということに他ならないだろう。

こうした説明は子どもの純粋無垢さに対する冒瀆と思われかねないが、幼い頃に「赤ちゃんはどうやって生まれるの？」という質問を記憶している読者は多いはずである。子どものこうした探索的な思索 (好奇心) を真摯に考察することは、愚かあるいは憚れるものとなっているようである。フロイト²⁾は知ることを認知愛的な本能のひとつであり、原光景での両親の性を知りたいという願望の形式で表現されると言及した。さらに、クライン⁴⁾は知への願望が乳幼児の攻撃性から生じる不安によって活性化することを付け加えた。つまり、ミッキーは偶然に真夜中に目覚めたわけではなく、そこには子どもの両親の関係性について知りたいという認知愛的本能に立脚した好奇心に起因していた。その結果、ミッキーは両親というカップルから排除されるが、母親の全幅の愛情に包まれ、あさのケーキと同じように子どものできることを無意識的に知り、ミッキーなりの知を獲得したということである。子どもの好奇心は多岐に渡り限らないものであるが、本質的に生命の神秘、生死に関わっていることを本書は見事に描き出していると言えるであろう。

IV. ま と め

日々の子どもの精神科の臨床活動において、初めて受診する言語表現も儘ならない子ど

ものこころの情景を知り、子どもたちの悩みを見つけ出すことは困難な作業である。子どもの悩みごとその子なりの個性があり、心的内容の詳細なところでは異なるが、センダックによって描かれた世界は、実際に臨床活動での子どもの悩みやこころの発達のテーマといったことに合致するものであり、子どもの臨床に関わる専門家にとっても、有用な本である。

本論文はセンダックの作品を用いて、子どものこころの情景を論じたものであり、センダックの作品の芸術性や作品そのものの価値を論じたものでないことを、最後に付記する。

付 記

本論文は白百合女子大学発達臨床センター紀要10号(2007)に収録された「こどものこころの情景」を基にしたものである。

引用文献

- 1) Bion, W, R (1962) : Learning from experience. Karnac Books (reprinted), London (福本修訳 : 『精神分析の方法 I <セブン・サーヴァンツ>』 (1999 8 法政大学出版).
- 2) Freud, S. (1918) : From the History of an Infantile Neurosis. SE X VII (小此木啓吾訳 : 『あ
る幼児神経症の病歴から』 『フロイト著作集⑨』 (1983) 人文書院).
- 3) 木部則雄 (2005) : 「万能感の功罪—「かいじゅうたちのいるところ」より」 『児童心理 No830』 金子書房.
- 4) Klein, M (1930) : The importance of symbol-formation in the development of the ego. The Writings of Melanie Klein, Vol.1 Hogarth Press, London (村田豊久・藤岡宏訳 : 『自我発達における象徴形成の重要性』 『メラニー・クライン著作集 1』 (1983) 誠信書房).
- 5) Klein, M. (1932) : The Psycho-analysis of Children. The Writings of Melanie Klein Vol.2, The Hogarth Press, London. (衣笠隆幸訳 : 『メラニー・クライン著作集 2 児童の精神分析』 (1997) 誠信書房).
- 6) Sendak, M. (1963) : WHERE THE WILD THINGS ARE, Haper & Row Publishers, New York (神宮輝夫訳 : 『かいじゅうたちのいるところ』 (1975) 富山房).
- 7) Sendak, M. (1970) : IN THE NIGHT KITCHEN, Haper & Row Publishers, New York (神宮輝夫訳 : 『まよなかのだいどころ』 (1982) 富山房).